

# ものぐさなきつね

小川未明

青空文庫



星は、毎夜さびしい大空に輝いていました。そして下界を照らしていましたけれど、だれも星を見てなぐさめてくれるものとなかったのです。星は、それを頼りないことに思っていました。

鶏が、朝早く起きて、そのりこうそうな黒い瞳の中に、星影を映して、勇んで鳴いてくれなかったならば、星は、毎夜毎夜、音もない野原や、黒い村や、白く霧のかかった林や、ものすごい水の上を照らしていることが、もう飽き飽きして、まったくいやになつてしまつたにちがいありません。

けれど、わかわか若々しいにわとりよるこ鶏の喜ばしなそうな鳴きなごえ声を聞くと、星は、  
すべての長いなが夜の間の物憂よるあいだかつたことなどを忘わすれてしまいます。  
そうして、ついにわとり鶏の愛想あいそうのいいのに引ひき込まこまれて、いつしよに  
日ひの上のぼらない朝あさの間あいだをたのおしく送おくるのであります。  
そのうちにたいよう太陽ひがしが東そらの空のぼを上のぼると、もはやにわとり鶏わかに別つれを告つげな  
ければなりません。星ほしはなごりさも名残惜おしなごりそうにして、西にしの空そらに没ぼつ  
てゆくのであります。するとにわとり鶏も、もう鳴なくのをやめてしま  
います。

こんなふうにして、星ほしと鶏にわとりとはほしたいそう仲なかがよかつたのです。  
星ほしの黙だまって、ぴかぴかとしてお話をはなしするのを、にわとり鶏は頭あたまを傾かたむけて聞き  
いていました。そしてにわとり鶏ほしだけには、星ほしのものをいうことがよくわ

かりました。また、にわとりな 鶏の鳴いていろいろなことを話すのも、星ほしにはよくわかりました。

「まだ牛うしも馬うまも眠ねむっています。私わたしだけが起おきたのです。」と、にわとり鶏は、おお大きな声こえを出だして叫さけびます。またつぎに、

「いま、ようやく家うちの人ひとたちは起おきました。そして、勝手かっもとでガタガタ音おとをさせています。いま、ろうそくに火ひを点つけて、裏うら口ちの方ほうへ出でてゆきます。きつと馬うまにまぐさをやるのでしよう。」と、にわとり鶏は告つげていました。

かくして、毎朝、星は夜の間に見た不思議なことを鶏に知らせ、また鶏は、村の中のできごとを星に知らせて、たがいに春から秋になるまで、長い間、仲のいい友だちであつたのです。星がしめやかな言葉つきで、

「いま、寒い風が、あちらの遠い森の中で騒いでいる。」と、鶏に告げますと、鶏は、うなだれて体じゆうを円くしてちぢむのでした。

「しかし、鶏さん、私はおまえさんを毎晩守つてあげますよ。」と、星はいったのです。

冬になつて、雪が地の上に積もると、鶏は小舎の中に押し入れられてしまいました。そして外へ出ることを許されませんでした。

あわ 哀れな鶏は、小舎の中こやのなかにいて、どんなに怠たい屈くつをしたでしよう。ただじつとしていて、耳みみに聞きくものは闇やみの中なかに狂くるう風かぜと雪ゆきの音おとばかりでありました。

「ああ、早く春はるになつて、土つちを踏ふみたいもんだ。そして、あの優やさしい黄金色こがねいろに輝かがやく星ほしの光ひかりを見みたいものだ。春はる、夏なつ、秋あき、なんという長い間ながあいだわたし私わたしたちはまた星ほしとお話はなしすることができらるう。楽たのしいことだ。」と、鶏にわとりは思おもいました。

星ほしはまた、毎夜まいよかぎ限かぎりない、しんとした雪ゆきの広野こうやを照てらしていました。ただ見みるものは白しろい雪ゆきばかりでした。そしてたまたま黒くろい森もりや、山やまや、流ながれが目めに入はいりましても、なにひとつおもしろい話はなしをするではありません。そのほか、怠なまけもの獣物けものや、いじ悪わるい

動物どうぶつはありましたが、自分じぶんに向かむつてやさしく話はなしをする、あのにわとり鶏とちのような友ともだちはなかつたのです。星ほしは鶏にわとりのことを思い出だして  
いました。そして早はやく春はるになつて、鶏にわとりが小舎こやから出でて、空そらにくび  
を伸のばして話はなしかける日ひになるのを待まつていました。

## 三

寒さむい夜よるのことでした。山やまにすんでいるきつねはもう山やまには餌えさが  
なかつたので、里さとへ出でてなにか探さがしてこようと野原のはらの上うへを歩あるいて  
きました。きつねは村むらへいつて鶏にわとりの小舎こやを襲おそおうと思おもつていたの  
です。



「おお、寒い。」と、きつねはつぶやいて、空を向いて、太い息をしました。

「この寒いのに、どこへゆくのですか？」と、星はたずねました。「山に食べるものがなかったから、里へ行って鶏でも捕ってこようと思うのだ。」と、きつねはめんどうくさそうにいいました。

星は、びつくりしました。しかし、きつねは、なかなか年をとっていて狡猾でありましたから、星はちよつとだますこととはできなれないと思いました。

「今夜あたり、狩人が寝ずに番をしているかもしれない。」と、星はささやきました。

きつねは、これを聞いてせせら笑いをしました。

「なんで狩かり人ゆうどが、鶏にわとりの番ばんなどをしてしているものか。」といいま  
した。

「おまえさんは、鶏にわとり小舎こやの在あり場ばを知しっているのですか。」と、  
星ほしはきつねに問といました。

「なに、村むらの中なかをうろついてみればすぐわかることだ。」と、き  
つねは答こたえました。

星ほしは、目めもとに笑わらいをたたえて、

「そんなことをして、うろついていると、狩かり人ゆうどに撃うたれてし  
まいますよ。それよりここに、もうしばらく待まっておいでなさい。  
やがて鶏にわとりが鳴なく時じ分ぶんです。そうしたら、じきにその小舎こやを見みつけ  
ることができます。辛しん棒ぼうが肝かん心じんです。」と、星ほしは諭さとすように

いいました。

「そうしようか。」と、ものぐさなきつねは村の方を見て、そうすることにしました。そしてじつと耳を澄ましていました。その夜は雪こそ降らなかつたが、いつにない寒い夜でありました。きつねはもう、なんとも我慢をすることができなくなりました。

「早く、鶏め鳴かないかなあ。」と思つていますうちに、間近の黒い森の方で、犬のなく声が聞こえました。きつねは、びつくりしました。

「そら、きつねさん、私のいわないことではありません。狩人の犬ですよ。」と、星はいいました。

きつねは、あわてて起とうとしましたが、尾が雪の上に凍えつ

いてしまつて、どうしても取れませんでした。やつとの思いで、  
痛<sup>いた</sup>いめをして引き離<sup>はな</sup>すと、きつねは空<sup>むな</sup>しく山<sup>やま</sup>の中<sup>なか</sup>へ駆<sup>か</sup>け込<sup>こ</sup>んでゆ  
きました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「読売新聞」

1922（大正11）年1月23～25日

※初出時の表題は「ものぐさな狐」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ものぐさなきつね

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>